



卓 話



「古典新訳文庫について」

光文社翻訳出版編集部編集長

駒井 稔氏

光文社の古典新訳文庫は2006年9月6日に創刊しました。2000年代に入り、同じ編集者同士の集まりでも、若者は携帯・ゲームで時間をつぶして活字離れ、若者に限らず人々の本離れは止まらないということが言われ、当時出版界はとてつもない状況にありました。



私は元々本が好きで、母が言うには子供ながらに不眠症で寝る前にお話を聞かせないと寝ない。字が読めない頃から読み聞かせが好きな子供だったそうです。小学生の頃は横浜の有隣堂に連れていってもらおうと、当時は貧しい時代でしたから一冊買ってもらうのに2時間かけて選ぶような子供でした。高校生で世界文学全集を読み、大学では文学部へ入り、そして出版社に就職しました。

最初の2年間程は営業にいましたが、その後週刊誌の編集部に移動となりました。週刊誌の編集部はある意味とても乱暴な職場で、皆さんからは想像もつかない生活を強いられます。いきなり毎日徹夜が続きながら、朝まで酒を飲む・・・このおじさん達は どうしてこんなに元気なのかと思うこともありました。30過ぎると部下ができ、いわゆるデスクとなりました。大学を出てほとんど何の社会経験もないまま、週刊誌の仕事で女優、作家、政治家、はては人殺しまで、ありとあらゆる階層、人種の方に会う機会があり、そうした経験からそれまでの頭でっかちな考えが払拭されて、人生とは複雑であり、世の中には色々な人が生きていることがわかってきた時期です。その時僕は どういう訳か古典を読みたいと思いました。週刊誌の編集部というのは原稿待ちのため非常に待ち時間の長い職場でもあります。人によってはチンチロリンや麻雀、はては酒を飲みに行ってしまう人までいました。そういった現実の混沌とした世の中に関わった為でしょうか、待ち時間を利用して34才頃から「アンナ・カレーニナ」を始めとして、40過ぎまで古典を読んで過ごしました。

そうした経験を経て、自分はずっと書籍志望で入社したのだから何とか書籍をやりたいと思い、書籍に移動願いを出して翻訳出版部に移動しました。そこは外国の書物をフィクション、ノンフィクションを問わずに出版する部門

で、年2回程アメリカや世界最大級のフランクフルトのブックフェア等に行く機会があり、外国の出版界の実情も知ることができました。驚いたことに、先進国の出版界は同じ病に冒されており、売れるものというのはセルフヘルプ、つまり「どう生きるか」とか「時間管理法」とかに限られ、いわゆる文学、特に翻訳文学というものが殆ど売れない。20世紀に入ってからますます顕著にイギリス、フランス、アメリカ、どこの国でも同じ現象が見られるということでした。

そもそも自分でも翻訳物を読んで難しいと感じていました。ドストエフスキーもそうですが、あらゆる文学、哲学がものすごく難しいと感じていたのです。52才になりますが、最後の古典教養主義の世代で、わからないということ、「王様は裸だ」ということがなかなか言えない世代でした。ところが翻訳の仕事をしているうちに、訳と原文と照合すると、コロンブスの卵ではないですが、翻訳が悪いということがわかってきました。

その頃から日本の出版界も模索を始めていて、「嵐が丘」、「白鯨」等の有名作品の新訳がぼつりぼつりと出版され始めて、編集者間では新訳というのが新しい可能性なのでは、と言われるようになってきました。つまり読めなかったことは訳が悪いのだ、或いはその時点では最高の訳であったかもしれないが、インターネットが普及し、学生でも気軽に海外に行ける世の中で、それまで分からなかった文化的な背景が簡単に分かるようになり、語学の質が向上しているにもかかわらず、翻訳そのものには誰も文句を付けていなかったということです。それは想像力の欠如ということもありますが、もう一つ、明治以来翻訳は日本文化を作ってきたので誰もそういうことに意義を唱えなかったからだだと思います。作家の三島由紀夫だけがどこかでもっと翻訳にクレームをつけるべきだと書いていたようです。しかし我々は分からないということ自分の頭が悪いのだと思っていたが、これはどうも違うということに気がつき始めました。

2003年に村上春樹が「キャッチ・イン・ザ・ライ」という翻訳を出しましたが、これは一つのエポック・メイキングな出来事で、翻訳には色々なバリエーションと訳す人の個性、そして感覚の捉え方があるということを教えてくださいました。ベンヤミンという翻訳家が「世界文学が成立し、翻訳という文化が生まれた時から、テキストより無限に新しいテキストが生まれて流れていくというイメージができた」と20世紀の初頭に言っています。そういうことから翻訳の可能性に誰も手を着けていないと思いました。

2004年の春に新訳の企画書を書いて上層部に提出しまし

たが、読者がいるのか、ビジネスとして成立するのか等、何度もやりとりがありました。本は初期コストが大変かかるもので、あまり儲かる仕事ではなく、ベストセラーがロングセラーにならないと利益が出ないビジネスの構造です。しかし私の勤めている光文社は「JJ」や「CLASSY」、「女性自身」などの雑誌部門で相当利益が上がっていたので、そういう意味では余裕がありました。しかし本のみ出版する出版社が厳しい状況にあることがわかっていましたので、こうした企画が経営的に成立するのか試算し、シュミレーションを行いました。

例えば「カラマーゾフの兄弟」で流通しているのは70年前、もう一つは35年くらい前のものです。実は30年も40年も50年も昔の翻訳がそのままずっと流通している。しかし増刷した数は80、100回を数えます。つまり作っておけば置いておくだけで自動的にそれが回転して利益につながるということがわかってきました。古典はロングセラーを売るベストのアイテムである。これならポツンポツンと出すのではなく、皆が読みたい物全てを新訳でという大胆なコンセプトを会社の上層部に伝え、なんとか通りました。

それから2年半ぐらい準備を周到に行いました。色々な翻訳家、大学の先生にお会いしましたが、「今古典を出してもうちの大学は最高学府だが学生は本を読まないよ」「反時代的な企画」「ドンキホーテのような企画」等どこへ行っても悲観的な事を言われました。しかし古典は絶対に読まれると思っていたのです。何故なら古典は100年、200年、特にシェイクスピア等は300年という年月を生きている力があり、それは今でも通じることを確信していたからです。そこで皆が古典を読まない理由は何かを最初に考えました。

僕自身も読みにくい訳で沢山の古典を読んでいたのですが、訳のテクニカルな分かりにくさをはじめとして、何よりも製品として魅力的にして再提出したいというのが僕の願いだったのです。今迄ですと「カラマーゾフの兄弟」の装丁にはドストエフスキーの肖像画が使われていました。そういうことに疑問を持ったのです。ドストエフスキーは賭博常習者で性格が破綻した厄介な人でした。それが文豪というカテゴリーの中に記号化されて押し込められている。そんなことをしているから売れないのだと考えたのです。僕自身古典売場に行くと、ここ30年、売場が縮小され続けているのを見て、何でこんなもったいないことになっているのかと考えた時、自分にとって何が嫌であったか考えれば良いと思ったのです。そこでまず、今の日本で訳された現代小説だと考えられるような、新しい装丁に変えてみたらどうかと思いました。

従って、紙や活字にも非常に神経を配りました。活字も今考えられる限り最も大きなものでシンプルな形のものを使用しましたし、活字の組の行間も広いものにしました。紙の色も7種類位用意し、実際文字をいれて、一番目に優しく不快感を覚えないものを選びました。人の目というものは非常に精巧に出来ていて、ほんの少しの刺激でも不快に感じます。何通りもダミーをつくって最も目に負担のない形を開発することに何ヶ月も費やしました。これは経費もかかりましたが、シリーズですから最初にそういう作業をしておかないと後の修正は不可能ですし、最初のインパクト

が何よりも大切ですので何度も試作版を作らせて大変気を配りました。つまり古典が30年間の内に読まれなくなっていった理由を一つ一つ排除して製品化を心掛けたのです。色々考えましたが、新書でも単行本でもなく、文庫本というスタイルを選んだのも、これからの時代は日本の家屋事情から本のストックが難しいと思ったからです。また昨今の経済状況ですので、なかなか2000円もするような四六版といわれる単行本が売れにくく、1000円以内のものしか手が伸びなくなっています。しかも非常に現代人は忙しい。そういう時に鞆の中にポンと入れて読んでもらうことが大切だと考えた結果です。

訳の問題に関しても読みにくい要因を排除していきました。「カラマーゾフの兄弟」を例にとりますと、ロシア人の名はとても日本人にわかりづらく、長すぎて読んでいるうちに誰が誰なのか分からなくなっていきます。そこで今までアカデミズムの観点からできなかったことでしたが、ミドルネームを取るということを決行しました。またロシア人の名前はアレクサンドルであるならサーシャ、ドミートリーならミーチャ等他にも変化があり、愛称が4つも変化する場合があります。それでは誰が読んでも分からない。そこで愛称は二つまでと決めました。それ迄のアカデミズムの常識からすると掟破りでしたが、読者にとって読みにくい部分を訳に関しても排除し、大胆な改革を目指しました。このシリーズは「今息をしている言葉で」というキャッチフレーズをつけましたが、このことは大変重要なことにもかかわらず、そういう言葉での翻訳はなされていませんでした。やはりちょっと古くさい言葉、例えば「旅籠に泊まる」等という表現がいくらかでも出てくるのです。そういうものではなく、けれども今はやっている言葉をそのまま取り上げるのではなく、30年位きちんと生きている言葉を取り入れようと、訳者の方と徹底的に打ち合わせをしました。やれる限り、読者の目線に立った作品づくりということを心掛けたことが成功の大きな要因だったと思います。

もう一つ、世界文学全集にしたくなかったということでした。「カラマーゾフ」、「リア王」、「星の王子様」（小さな王子）、カント等社会科学や、哲学まで縦横に、我々が面白いと思ったものを次々出していこうと思ったのです。つまり全何巻とかイギリス編とかいう古典的な教養主義的な読み方に私自身が随分苦しんできたので、自由なラインナップでこんな面白いものがあると紹介していくことにしました。例えばロダリンの「猫とともに去りぬ」は日本で初めて訳された小説です。日本の外国文学の偏った需要の仕方もうち破りたいと思い、そうした小説も取り入れることにしたのです。カント等も普通の言葉だけで訳すというかなり無理なお願いをしました。僕自身がつまずいた言葉を一切廃し、普通の感性で訳して欲しいと細かい事まで注文をつけました。この様な翻訳は今迄なかったので、初めてカントが読めたと聞くと大変嬉しく思います。

この企画は会社にとっても僕自身の人生にとっても大変な冒険だったので、9月に創刊した時は読者の反応が大変気になりました。ところが蓋を開けてみると一週目からものすごい売れ行きで、こういうのを待っていた人がいたことを実感しました。あっという間に8冊のうち6冊が増刷とな

り、特にカラマーゾフがぶっちぎりで、それにあのカントがどうしてこんなに読まれるのかという程売れ、また「猫とともに去りぬ」という誰も知らない作品も2万8千部と、一年半でこのような作品としては破格の部数が売れたのです。アーサー・C・クラークの「幼年期のおわり」というSFは大学生の第一回読書人大賞、「カラマーゾフの兄弟」は毎日新聞出版文化特別賞をもらい、反時代的といわれていたものにこんなに潜在的読者がいたとわかった時、編集者としてこの仕事をやっていて本当に良かったと思いました。

この9月で2周年を迎えますが、「カラマーゾフの兄弟」は全5巻で累計80万5千部まで行きました。多分ミリオンセラーになると言われていますが、世界でこうしたものがミリオンセラーになるのは多分もう日本しかないと思います。今日本人はそれ程危機感を抱いているから、こういう時代に指針を失った人が「カラマーゾフの兄弟」を読みたいと思っているのではないのでしょうか。読者ターゲットとして当初考えていたのは団塊の世代でしたが、実際は去年の秋位から、20代、30代の女性が「カラマーゾフの兄弟」を熱狂的に読み始めていることが調査でわかりました。昔読んだが、再度読める訳で読みたいという人達を読者に期

待していたのが、実際は若い人にも広がり、ついには大学生に賞を貰えることにまでなったのです。僕自身も編集者人生として大変貴重な体験をしたと思っています。近いところでは「罪と罰」を亀山先生に訳してもらいます。日本人はロシア文学が大変好きなのがわかりましたので、ドストエフスキーの主要作品や、「アンナ・カレーニナ」等といったものから、ルソーや誰も知らないイタリアの幻想的な短編、メキシコの1600年代の小説まで、ほぼ自由に、既存の権威にとらわれず、読者に長く提供していきたいと思います。読者の流れを変えることは大変なことで、多くの読者が光文社の古典新訳文庫のところへ自動的に足が進むようになるまで2、3年かかると思います。毎月2冊というのはかなりきつい仕事ですが、読者の消費行動を変えることが一番大切なので続けていき、いつも新鮮な驚き、ラインナップを心掛けていきたいと思います。多分来年で100冊になります。今後書店に行く機会がありましたら、また、月に1回出している朝日新聞等の広告等を御覧になって、これは面白いと思ったら是非手に取ってみて下さい。昔読んで難しかったものでも、私どもの文庫なら必ず完読できると保証します。